

## 故郷の中の異郷を地鳴りのように感受する人

黛元男第五詩集『地鳴り』に寄せて

1

詩作を志すに者にとつて、生まれた場所に促され生涯にわたり詩作を続ける者こそ、理想的な詩人だろう。多くの詩人は故郷を忘却したり敬遠したりして異郷に暮らす。そして意識的に放浪をしていつか帰郷することを夢想しながら、根源的な故郷の詩を夢想しているのかも知れない。その中には異郷を第二の故郷として生きているものもいるだろう。いずれにせよ故郷という場所は、詩人がいつも立ち返る原点であり感受性の母胎であり、詩的言語の重要な源泉なのは明らかだろう。さらに故郷にいる詩人が故郷を掘り下げ、異郷との地下水脈で繋がっていることに自覚的であるのなら、その詩人は故郷にいながら世界の根源を語れる可能性がある。むしろ故郷を持つからこそ世界の多様性を語れる端緒となるのかも知れない。

生まれた場所の地熱のような言葉を異郷の同様な言葉と接合して紡ぎだすことはできないか。そんな思いを抱いて故郷にいる数少ない詩人たちは、そんな通路から汲み上げた言葉を探そうと試みる。一九六九年に刊行された黛元男さんの第

一詩集『ぼくらの地方』を読んでいると、その場所で生きざるを得ない、宿命を帯びた存在として自らを自覚していることが分かる。しかし決してその場所は永遠ではなく、刻々と奥深い地底から変化の兆しを示しながら、新しい場所が出現している冷徹な眼差しがある。そんな時代の証言を受け止め記述するのが詩作の試みであると考えている。その意味では黛さんは時代における地鳴りのような故郷の地殻変動を自らの生きる場所から目撃し、世界の異郷の変化を感受しようとしてきた詩人である。詩法としては「物のあわれ」を感じながら「物に語らす」というような黛さん独自のリアリズムの手法を自覚的に試みようとしている。詩「燃える水」を引用してみる。

### 燃える水

いま

紀伊半島の

土中ふかくあるものめざして

ボーリングのきつ尖をおろしてゆく

ふいに泥土をふきあげ、ほとぼしるものがあるたびに

ぼくらはかけ寄り、とり囲むが

そいつはたいていだめなのだ

わずかな鉄、わずかなラジウム

あるいは牛乳いろにうすにこりした

なまぬるい硫黄の湯にすぎぬ

雑菌ひとつ殺さぬような冷えた湯だ

伊勢志摩から熊野の沿岸にかけて

どこを掘ってもわきだすような

なま温かい湯などはだめだ

ぼくらはまた土に腰をおろして

そいつのことをかんがえる

いまはまだ

沖積層のぶあつい岩磐のかげにかくれている。

だが、いつか

錐ヒラキの尖がそいつに出合うやいなや

地響きとともに数千尺をはいのぼり

安全弁などふつとばして

もうぜんとう湧きでてくるやつ

うっかり煙草火にでも引火したらさいご

天をこがす大火柱をふきあげて

三日三晩も燃えつつけるそいつ

千万年、夢みる物質たちが

地の底ふかくたくわえてきた

燃える水のせいかつな流れをもとめて

ぼくらは林のように鉄やぐらを立て

地中にえんえんとチュービング管を延ばしてゆく

はたして

日本列島の地の底は

いかなる奔流を

内臓するか。

三重県のある紀伊半島の地下には、「千万年、夢みる物質たち」である「燃える水」があり、それを掘り当てると「日本列島の地の底」に通じていて、その内蔵されている奔流を幻視している。黛さんの初期の詩的発想には、地下に埋蔵されているエネルギー源と民衆のエネルギーを重ね合わせたいという願いが込められているように思われる。民衆の一人である黛さんの中のエネルギーを詩的言語に宿らせたいと願っていたのだろう。伊勢志摩から熊野沿岸の地底から掘り出した「硫黄の湯」に失望しながらも、それを掘り続けて「燃える水」を探し続けることは、決して愚かな試みではない。誰かが試さなければ「ぼくらの地方」の「地の底ふかくたくわえてきた」何ものかを探すという可能性は永遠に閉ざされたままで。「燃える水」は単なる石油ではなく、ぼくらの情熱でありながら日本の民衆の情熱であると黛さんは告げたかったのだろう。黛さんはその民衆のエネルギーをいかに詩作の中で宿すことが出来るかという困難な課題を自らに課していたように思われる。次に引用する詩「伊勢案内」も黛さんの詩作の原点を垣間見せてくれている。

## 伊勢案内

おどろくのはまだまだ  
奥へ進むと

もつと太いがある

参道の左右に

大煙突のそびえ立つとき千年杉が何本もある。

垂直にきそい立つ老杉のむれが

空をくらめておい茂るさまは

原始の森さながらだろ。

内宮正殿はもうすぐ

前方の樹の間をすけて

白肌の板垣がみえてきたのがそうだ。

神路山のみどりを截って

まっ白な檜材を組み立てた

妙にまぶしい古代の建物

神宮建築の素朴美というやつを

ブルーノ・タウトは熱っぽく紹介しているが

あなたの感想はどうだ。

私には

ここらあたりにたちこめる

精神のお化けなどまつびらごめん

だが、屋根の頂に千木を突つたてた

ここ内宮の高床式住宅にそっくりなのが

セレベスやスマトラのニツパヤシの木陰に

いくらかも見られるというはなしは

天孫族のいかめしい伝説をふつとばして

はなはだ愉快なかぎりだ。

○

それは

枯れた葦でも

水草のむれでもない

みわたすかぎり

白っぽい葉うらをかえし

古わらのように枯れた稲なのだ。

五十鈴川の河口にひろがるいちめんの常習塩害田

穂首もなくたつている土いろの稲

泥の中に折れ伏し

うち重なり

中には

根もとから腐れて

稲の形骸もない田がある。

海岸線にちかづくにつれて

それがだんだんひどくなるのがわかるだろう。

はるばる伊勢をおとずれた

農林省のあなたに

みせたいのはむしろこの絶景だ。

支えようもない地盤沈下と

としどしの颱風がかきむしるみごとな荒廢を

あなたの眼底にやきつけたいのだ。

その松原のさきは二見の海

あの蝕んだ夫婦岩を浮べた

ちっぽけな風景などをみにいくのは

もつと後でよい。

三重県には伊勢神宮があり、「天孫族のいかめしい伝説」が昔も今も生きている場所である。「精神のお化け」に取り込まれないためには、リアリズムの精神で対峙しなければならないうと黛さんは考え実践している。伊勢神宮の建築様式は、東南アジアにも類例はあるのであり、日本独自の様式であると価値付けるところから戦前のアジア蔑視の「精神のお化け」が生まれてきたのだ、という強い批評精神が黛さんには初期からある。そしてかつての稲の文化の風景が衰退し、そこに生きる農民たちの苦悩や危機意識を代弁している。私たちが守るべき風景は、日本の独自性を過大評価する神道の神話ではなく、労働をして生きる場所であり、それこそ残すべき本来的なものであることを告げている。黛さんの詩的精神は、他国の他者たちの視線を想定しながら日本的な神秘思想と対

峙しようとしている。「常習塩害田」とは初めて知った言葉だが、日本という国の成立に稲作の弥生文化が大きく関わっていることは周知の事実だ。その地域の稲作が塩害によって危機に瀕している状況と対比させて、民衆・農民の暮らしの切実さから「精神のお化け」の権威を借りた政治・行政の在り方を批判している。伊勢の地は縄文人たちがあまり住んでいない未開拓の地であったから百済系の弥生文化の人びとがやって来て新たに發展させることが可能だったと最近の歴史研究の中で言われ始めている。日本独自だと思い込んでいたものが百済文化やアジアの様々な文化に多くを負っていることは間違いないだろう。伊勢神道は鎌倉時代に成立したもので縄文時代の数千年の歴史からしてみれば、たいして古いものではない。哲学者の鈴木大拙が一九四四年に書いた『日本の靈性』の中で神道について述べている。「清明心・丹心・正直心などというものは情性的であって、まだ靈性的領域にはいらぬ。物忌みするとか、穢れを祓うとかいうことも、いま一段の深みを加えてこぬと、原始民族の心理以外に出ないのである。伊勢神道は、これらの情性的直覚に対して形而上学的または宗教的基礎づけをしようと試みたが、必ずしも成功したとは言われぬ。なんとすればこれらは靈性的直覚でないからである。」このように日本の独創的な哲学者の一人であった鈴木大拙は神道の限界を見据えていた。まだ宗教としても哲学としても徹底されていない神道を平田篤胤一派

の国学者達の神道が、軍部と一緒に狂信化することによって、国を危急存亡の危機に陥れていることに激しい怒りを感じていた。鈴木大拙は日米開戦時から敗戦を覚悟したという。そして敗戦後に自信喪失した日本人が世界的使命をいかに考えたらいいかを論じたものと言われる。伊勢に隣接する久居に暮す黛さんがなぜ神道について「精神のお化け」という表現を使用しなければならなかったか、その理由が分かる気がする。日本人ははまだ「精神のお化け」をきちんと精算し切れていないのではないかという黛さんの痛恨の思いが感じられるのだ。

2

一九八二年に刊行された第二詩集『沖繩の貝』は二十三篇の詩が収録されている。黛さんはあとがきで「私たちの歴史には、広島、長崎、沖繩の体験を始め、戦前、戦後の民衆の生きるたかひの中に、風化させてはならない重要な部分がある」と語っている。時代が民衆の戦前・戦後体験を風化させていくのに抵抗する精神の重要性を告げている。その中でも詩「車輛連結部について」が戦後間もないころの労働運動を担った黛さんの信条を印象深く表現しているように思われる。

#### 車輛連結部について

どの連結器にもぎっしり座りこんで  
ぼくらは東京をめざしていた。  
揺れる東京に  
はげしいデモがかけられた。  
ぼくらの腕のスクラムは  
切られてはまた  
組み直した。

いつごろからだろうか。  
ぼくらがそこに乗らなくなったのは。  
そこが単なる車輛の通路となったのは。  
ぼくらは結婚し子供をつくり皮下脂肪の肉が腹につき  
やわらかい座席の背にもたれて  
うとうと眠るようになった。

連結器は  
ぼくらからだんだん遠ざかり  
酒でも飲まないかぎり思い出さなくなった。  
いまでも、そこは

あいかわらずの武骨さで  
間断なく揺れうごいているだろうか。  
ぼくらの全身を突きうごかし  
ぼくらの思想をつよく揺さぶるだろうか。

いまも

いまでも、そこは  
はげしく揺れうごいているか。  
突っばしる車輛の連結部。

全車輛の重量がそこに押し寄せて  
鋼鉄の腕がちぎれるように揺れ  
鉄の関節が

ギヤー ギヤーと鳴りひびいているか。

波のように躍りあがる

鉄の床板に両足を踏まえると

いまでも

重い衝撃のこもったあの震動が

ずしんずしんと

ぼくらの腹にひびいてくるだろうか。

戦後のぼくら。

ぼくらはいつも連結器の上に押しこまれた。

そこにバリケードのように米袋を積みあげて

闇米を運んだ。

まつ暗なトンネルに突っこんでゆく

連結部のくらがりで

ぼくらははげしく女を愛した。

そして夜行列車に乗りこみ

どこかを懸命に走っている

車輛連結部よ

おまえは健在か。

私は冒頭の次に置かれた詩「車輛連結部について」を読んだ時に、黛さんの詩的精神の大切な場所に触れた思いがした。終戦後に若き黛さんが列車で移動する時にいつも車輛連結部に乗ったことを過ぎ去ったこととして追憶しているのではない。全車輛の重量が押し寄せてきて足元から突き上げてくる体験が、黛さんの根源的な思想として肉体化されていることを反復している。普通座席はもちろんだが通路でもなく、「車輛連結部」に立ちつくすことが自分にとって一番相応しい位置で、最も多くのことを感じられる場所であるという信念を抱いているのだ。決して安住することなく、戦後間もない危機意識を持統している精神性が黛さんの詩篇には色濃く流れている。「ぼくらの全身を突きうごかし／ぼくらの思想をつよく揺さぶるだろうか。／いまも／どこかを懸命に走っている／車輛連結部よ／おまえは健在か。」という最終の六行は、詩人が思想を肉体化することの意味を静かに語りかけてくる。私には忘れがたい詩行となって自らの詩作の姿勢だけでなく生きるこの実践的な精神として突きつけられてくる思いがする。

一九九二年に刊行された第三詩集『小さな噴水』には二十三篇の詩が収録されている。第三章の六篇が原発・核弾道ミサイルなどに関係する詩篇だ。その中でも詩「幻の原子炉」は原発反対運動の歴史においても重要な出来事を記している詩篇だ。

#### 幻の原子炉

中国河南省の  
 広大な闇の中に  
 ぼつんと建つ農家があり  
 周囲の土壁をぼんやり照らして裸電球がぶらさがっている。  
 五〇軒先の小さな変電所  
 さらに四〇〇軒はなれた上流のダム湖から  
 はるばるやってきた電流が  
 農民の頭の上に  
 白く灯る。  
 電灯のない村がまだまだ。  
 どんなに光を大切にしているか、かれらは。  
 中国の旅から帰ったばかりのKの話は  
 自然も文明も  
 想像を絶している。

宙にぶらさがっている。

三重県の芦浜はほとんど人の手が入っていない無人の砂浜だったという、ハマゴウやハマヒルガオの花が群生し、アカウミガメが産卵する貴重な自然を残した浜辺だ。この熊野灘の美しい場所に一九六三年、中部電力が原発を計画し、一九六四年には芦浜地区を候補地と決定した。このことによつて芦浜の漁民たちが中心となり三重県の多くの住民を巻き込んだ反対運動が始まった。一九八四年には三重県も関連の予算を計上し、議会も推進の決議をした。しかし原発は安全であると言われていたが、世界中を震撼させた一九八六年のチェルノブイリ事故が発生し、続いて一九八七年には第二のチェルノブイリになりかけた福島原発の臨界事故などが起きた。また一九九九年の東海第二原発の臨界事故では作業員が二名被曝死し、六六〇名以上が中性子被曝をして、周囲の三十一万人が避難した。この間、三重県住民たちの粘り強い反対運動によつて二〇〇〇年には正式に三重県は芦浜原発を白紙に戻し事実上は中止にする決定を中部電力に伝えた。このことにより三十七年もかけて反対運動がようやく勝利したのだ。私は子供の頃よく遊びに行った父母の田舎である福島に福島原発が作られたこともあり、一九八七年の第二のチェルノブイリになりかけた福島原発事故を含め、原発には関心を持ち続けていた。また茨城県の東海第二原発も私の暮らす

こちらでは

真夏日のある午後  
 クーラーを全開にして湯水のように電力を食ったあげく  
 変圧器を麻痺させた首都がある。

真昼の大停電のなかで  
 ひとびとは

電力が有限であることによりやく気づいた。  
 不足する電力を  
 何処でつくるか。

何処でなんて愚かなことだ。  
 いつも、山間の部落や海辺の村がねらわれる。

そこに生きる人たちが追い払われる。  
 芦浜に一つ。

熊野に一つ。  
 青写真の原発が建つ。

わしらの海を売られてたまるもんけ。  
 漁民の女房たちが

熊野八千の全戸に秋刀魚の丸干を配って反対キャンペーン  
 を張った。

青写真は青写真のまま  
 色褪せる。

キリンの首のように長い三段クレーンの先から  
 幻の原子炉が

千葉県の隣であり、一九九九年の臨界事故にも他人事ではない強い危機意識を持っていた。それゆえ三重県の住民が果たした芦浜原発反対運動は、国と電力会社の原発推進の流れを止めた画期的な運動だったと考えている。黛さんは中国の田舎の電力を大切に暮らしと対比させ、真夏に湯水のようにクーラーを全開させて、「変圧器を麻痺させた首都」の存在のあり方を鋭く批判する。このような産業中心の文明を批判した黛さんは、真に現場の民衆を生かすための透徹した眼差しに基づいているから可能だったのだろう。「わしらの海を売られてたまるもんけ。／漁民の女房たちが／熊野八千の全戸に秋刀魚の丸干を配って反対キャンペーンを張った。」ことを記したこの詩篇は、記念碑的な詩篇として後世に残るだろう。

4

二〇〇二年に刊行した第四詩集『骨の来歴』二十篇は、すべて日本の古代人に対する深い畏敬の念に基き、その縄文遺跡に触れた驚きを詩化したものだ。たぶん黛さんにとつて伊勢神道の「精神のお化け」を根底から克服するためには、日本の古層である縄文文化を直視する連作がどうしても書きたかったのだろう。それもただ縄文文化の讃歌で終始しているのではなく、縄文文化の視線で現在の日本の文化文明を逆照射してくる視点が黛さんの特徴だろう。数千年の歴史から現在が批評されてくると言ってもいい。なかでもタイトルの詩

「骨の来歴」が今度の新詩集につながる黛さんの視点が暗示されている。

## 骨の来歴

内陸ふかく

古い海岸線が走っている

その海辺に波音を聞いて暮していた縄文人たちが  
いくつかの貝塚を残した

茨城県取手市の中妻貝塚もそのひとつ

ヤマトシジミの貝殻層の下を掘りさげると

一坪ほどの円い穴がある

身をかがめて土を除けると

百体にあまる人骨や頭蓋がぎっしり埋められていた

個々の土壙から骨を掘り返し

骨の泥を洗い

一族集団の霊を集めて手厚く再葬したのだろうか

精霊がいく代も子や孫につたわり生れかわる

貝の石灰分が染みとおり

骨を守ってきた

ここの土砂からは人の骨が出る

安濃川改修のショベルカーから降り立った男が

この詩篇を読み、縄文人たちが家族や一族を手厚く葬る数千年の暮らしを続けていたことに対比させ、自分たちが同時に遭遇した津市大空襲などの空爆死した死者さえ、いまだ葬りきれいでないと黛さんは痛恨の思いを抱いていることを知った。反戦に対する強い思いは、ユリカモメの群を死者たちの霊魂と感じ取ってしまうのだ。私は戦争中に被災した多くの死傷者に対する黛さんの鎮魂・慰霊の思いが同世代の代弁をしているかのようにも思えてきた。「骨の来歴」を問うことは、どうしてこの骨がここにあるのか問うことであり、その場所であった悲劇を後世に残すべきであると考えている。「河岸に立つ市立病院」の空襲体験を残そうとする試みは貴重なことだと思われる。二〇〇九年三月十日に刊行された『大空襲三一〇人詩集』にこの詩「骨の来歴」は収録された。この詩篇もまた読み継がれていって欲しいと願っている。

5

新詩集『地鳴り』は七年ぶりで、三十二篇から成り立っている。第一章の十三篇は戦争中の海軍少年兵の生々しい体験など戦争に関係する詩篇だ。この当事者でしか分からない体験を黛さんは胸に秘めて戦後社会を生き抜いてきたのではないか。そして晩年になり後世に残さなければならぬという使命感で詩作したのだと思われる。

そつと洩らした

丸い石にまじり灰色の枯枝のようなのが骨なのか  
かれは掌にのせて私に見せた

1945年7月24日 津市に真昼の大空襲

河岸に立つ市立病院に一トン爆弾が降りそそいだ

樹木は逆立ち なぎ倒され

服の切れ端や肉片が枝に吊りさがる

裏山に逃げようとした患者 職員たちが

つぎつぎに吹き飛ばされた

堤防や河川敷に

投げだされた

五十年を経て

やつと拾われた骨が草のうえに陽をあびる

河口に近い

汽水域のあたりに

舞いあがり舞いおるる灰白色の鳥影がある

飛び去るかと思えると

また反転して舞いもどってくる

あれはユリカモメの群か

霊魂か

## ぼくの富士

蒲原かたはらの

長いトンネルをやつと抜ける

急流を眼下に

橋梁を渡るひかり148号の車窓から

あつ 富士

銀雪にかがやく山頂から稜線が左右に流れおち

青い裾野がゆるやかに広がっている

快晴の冬の空に

久しぶりに見るお前の姿だな

そこからも富士が見えた

清水海軍航空隊の北西の空に山巔がせりあがり

はじめてみる練習生の瞳には

まぶしい美しさだった

きさまらあ、富士が見えるなどと手紙に書くんではないぞ

軍機密だぞ

ミッドウェイの海に投げだされ陸をかに上がった一等兵曹がど

なっている

きさまらあ、おまえたちの乗る飛行機はもうありやあせん

のだ

連合艦隊はどこかに潜っている――

では ぼくらは何だったのか

三保の松原の砂を掘り

人間魚雷艇「震洋」の半地下壕の屋根に

何万杯の土が盛りあげられた

くる日もくる日も土を運ぶぼくらを

富士は見ていただろう

だが、ぼくらから富士を見あげることがなくなった

きさまらあ、娑婆つけをだしおって

甲板にはいつくばって全員制裁を受けるぼくらの屈辱を

富士は見ていたことだろう

消灯のあと

骨の痛みに反転する夜があった

清水が燃え

静岡が焼け

血の色に染まる巨大な山稜を

もはや誰も見ようとはしなかった

厚い雨雲が

富士の空にたちこめている

山小舎の屎尿もゴミも

東富士演習場の荒れた原野も

製紙工場から流れる汚泥も

いつさいを呑みこんだ濃霧の中に

素顔の富士が立っている

赤い溶岩を

ぼろぼろ転がしながら。

清水海軍航空隊少年兵だった黛さんは、富士山を見る時に、複雑な思いに駆られる。「きさまらあ、富士が見えるなどと手紙に書くんではないぞ／軍機密だぞ」という一等軍曹の声が想起される。十四、五歳だった黛さんたち少年兵は、制空権をなくし、日本中の一八〇都市に空爆が実行されている最中の戦争末期に訓練が始まった。眩しいくらい美しい富士を目の前にしながら、大日本帝国の崩壊を感じ始めていたのだろう。「きさまらあ、おまえたちの乗る飛行機はもうありやあせんのだ」という軍曹の絶望的な言葉を聞きながら、自分たちの課せられた任務の疲労感に苛まれていたのだろう。三保の松原の砂を掘り、へ人間魚雷艇「震洋」の半地下壕の屋根に、砂をかけ続けることの無力感が沸きあがってきたのだろう。その虚しい作業や軍曹たちからの制裁を受けて這いつくばる屈辱的な姿を、富士山がすべて見ていたことを黛さんは想起させられるのだ。日本人にとって富士山は誇りであるが、黛さんたち清水海軍少年兵たちにとって富士山は、大日本帝国の軍国主義が行った愚かな行為の目撃者であると黛さんは感じているのだ。

一章の黛さんたち中学三年生の生徒たちが三菱航空機四日

市工場の寮生活で、劣悪な食事やジフテリア菌が面延し帰郷

が中止になったことに抗議して、寮で引き起こされた「ある

騒乱」は、当時の中学生たちの置かれていた状況をよく伝え

ている。その「ある騒乱」「ぼくの富士」、「壕の中」などの詩

は黛さんの経験であるが、歴史的にも貴重な詩篇だ。空襲で

近くの「清水が燃え／静岡が焼け」ているのに清水海軍航空

隊からは一機も迎撃に向わない。戦争に本当は負けているの

であり、大人たちは真実を言わない情況で、少年兵たちは自

分たちが乗り込む可能性のある人間魚雷艇を上空から見えな

くするためにただ虚しく砂を運んでいるしかない。この奇妙

な情況下の総力戦である戦争の悲劇が浮き彫りにされている

のだ。

二章の詩「地鳴り——浅井十三郎と村人に」は、戦後の詩

誌運動の原点を辿ることの意味でも貴重な。

地鳴り

——浅井十三郎と村人に

越後の山麓から

ひとりの詩人がよみがえる

火を噴いて屹立している浅井十三郎

九尺の雪が軒下をうずめる豪雪地帯に住み

電線をまたいで歩く村の道

積雪を割って苗代をつくり

ヤロビ農法の種子をまきつける

四、五反の田畑の土に心血を注いだ

困窮と飢餓

の重い火焰を背負いつつ

詩の鬼となった

詩誌「詩と詩人」と詩書の刊行

が どれほどかれの家計を圧迫したか

着物がなくなり畳がなくなる負債の日々

どしておらのうちはフトンが無いのかという子供

だが 五〇年代

その雑誌に

リアリズム詩人の若い俊英たちが集って書き

地方から反乱し

芸術の野望を燃えたさせた

五六年六月 一一一号のうら表紙

黄ばんだ地に刷られた六号活字の発行所が

ぼくの目をうばう

新潟県北魚沼郡広神村並柳 詩と詩人社

あ 浅井十三郎の村は

震度7の川口町から15キロ

全村民が避難した山古志村から10キロ  
まさに震源地ではないか

山が動いた

山が消えた

棚田がくずれ落ちた

言葉を失った村人が喉から声をしぼり出す

自転車から落ちて頭部を強打する。田の畦がくずれていたのを修理したあと寝につくが、出血が止まらず車で病院にかけつける。入院。頭を扶けるような痛みとおのれの死の予感の中、病状と心象を記録した一〇六行の詩「脳蜘蛛膜下出血」を書き残す。十月二十四日永眠する。四十七歳であった。

揺れうごく大地から

雪のちかい中越の里にあらわれたあなた

孤独で反骨で苦悩の人であつた浅井十三郎よ

村人の心にあなたの姿は見えているか

(略)

大阪の戦後の詩誌運動を切り拓いていった浜田知章の「山河」で中心的な働きをしていた湯口三郎と長谷川龍生たちは、

新潟の浅井十三郎の家にひところ厄介になり、「詩と詩人」の編集を手伝っていたという。また大崎二郎さんなど全国の秀英たちもこの「詩と詩人」に投稿をしていたと言われる。黛さんが詩「地鳴り」をなぜ書いたのか。それはきつと戦後詩の発端を切り拓いた若き詩人たちを育てた浅井十三郎に敬意を抱き続けているからだろう。その地鳴りのような詩的情熱を長く詩誌「三重詩人」の編集発行者であつた自分に反復させていたのではないか。戦後間もないころから錦米次郎たちと一緒に黛さんは、いつも「ぼくら」が主体的に関わる詩誌運動を担ってきた。錦さんが亡くなり『錦米次郎全詩集』の発刊にも刊行会代表として力を尽くした。黛さんの新詩集『地鳴り』は第一章の戦争中の少年兵の体験から三章の妻を介護する連作「介護日誌」までテーマは幅広く、黛さんの多様な魅力が詰まっている詩集だ。長く携わっていた詩誌「三重詩人」の編集発行者としてではなく、一詩人黛元男がどんな本質的な課題を担って戦後社会に対峙して詩作を挑戦し続けてきたかを辿ることができる。その誠実な試みは私にとつてもずしりと重たいものであつたが、潔い詩人の生き方が心にとつと届けられた思いがした。そんな詩篇を全国の詩誌運動を担っている詩人たち、またこれから本格的な詩誌を作ろうとする若い詩人たちに、また戦後社会を懸命に生き抜いてきた人びとにぜひ手にとつて欲しいと心から願っている。